# 令和6年 能登半島地震 能登町 入浴支援 災害ボランティア 活動報告

学　　生：信末 幸輝、宮本 惇平、吉田天翔、今村 海里、木村 琴美、鈴木 唯華、高橋 寛、松本 琉暉、女川 陽生、善家 翼、松山 世那、村上 凜、小西 翔陽、木村 磨功、遠藤 成矩
大学院生：増留 流輝(厚生労働省DMAT事務局)
教　　員：小川 理郎、鈴木 健介、中澤 真弓、原田 諭、天野 智仁、小倉 勝弘、斎藤 達、三橋 正典

## 1　はじめに

令和6年1月1日に石川県能登地方で発生したマグニチュード7.6の地震により、能登半島全域に甚大な被害を受けた。被災地域では、電力や水道、下水道などのライフラインが大きく損壊した。震災後、ライフラインは、部分的に復旧したが、下水道の修復は難航しており、衛生状態の管理が課題となっていた。

特に、発生直後の1月6日から1月10日の期間に日本体育大学 救急医療学科と日本医科大学付属病院の合同チームが医療支援活動を行った能登町では、入浴が困難なを必要とする高齢者への支援が求められてた。

この状況に日本体育大学 救急医療学科は、能登町役場および石川県庁 健康福祉部 長寿社会課から入浴支援の依頼を受け、能登町での入浴支援と災害ボランティア活動を行った。現地で行われた災害後の生活支援と地域復興に向けた活動を報告する。

石川県の能登半島（能登地方）能登町

能登町の新鮮なイカ

能登町で出会える満天の星

## 2　現地派遣期間

| 派遣チーム | 日　程 | 派遣者 |
|---|---|---|
| 第1団 | 3月6日（水）～3月9日（土） | 教員３名、学生３名 |
| 第2団 | 3月20日（水）～3月23日（土） | 教員３名、学生５名 |
| 第3団 | 3月27日（水）～3月30日（土） | 教員２名、学生５名 |

## 3　現地の被害状況

① 能登町白丸地区の地震と津波による被害

② 倒壊した家屋

③ 地震により突出したマンホール

## 4　関係機関への訪問

石川県庁 健康福祉部
長寿社会課 訪問

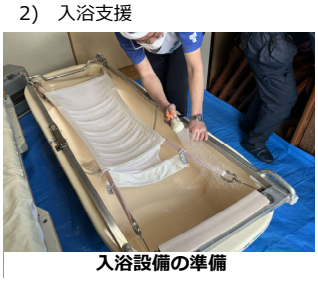
石川県庁 DMAT事務局 訪問

能登町役場 健康福祉課 訪問

## 5　入浴支援 活動

1）　活動場所
- ①　特別養護老人ホーム - 石川県鳳寿荘
- ②　ケアホームいるか乃里
- ③　能登町役場 小木支所 福祉避難所

2）　入浴支援


入浴設備の準備

福祉避難所での入浴支援

3）　1日の流れ

| 時　刻 | 活動内容 |
|---|---|
| 7:00 | 起床、各自身支度 |
| 9:00 | 宿泊先 出発 |
| 9:15 | 午前の活動場所到着(老人介護施設) |
| 9:30 | 入浴支援開始 |
| 11:45 | 活動終了 |
| 12:40 | 昼食、休憩 |
| 13:00 | 午後の活動先へ出発 |
| 13:20 | 午後の活動場所到着(福祉避難所) |
| 13:25 | 入浴支援開始 |
| 15:00 | 入浴支援終了 |
| 16:00 | 宿泊先へ到着 |
| 18:30 | ミーティング |
| 19:30 | 各自担当事務処理 |
| 22:00 | 就　寝 |

## 6　災害ボランティア

1）　内　容
ボランティアの種類（家財の整理、瓦礫の撤去など）

2）　ボランティア活動の流れ

① 災害ボランティアセンターでの登録

② 依頼先での活動(瓦の撤去)

③ 廃棄物仮置き場への運搬

④ 活動報告と申し送り

3）　1日の流れ

| 時　刻 | 活動内容 |
|---|---|
| 7:00 | 起床、各自身支度 |
| 8:30 | 宿泊先 出発 |
| 8:45 | ボランティアセンター到着 |
| 9:22 | ボランティア登録、活動先へ出発 |
| 9:30 | 午前の活動開始 |
| 11:45 | ボランティア活動終了 |
| 12:00 | ボランティアセンターへ帰設、活動報告 |
| 12:40 | 昼食、休憩 |
| 13:00 | 午後の活動先の確認、活動先へ出発 |
| 13:20 | 午後の活動開始 |
| 15:00 | ボランティア活動終了 |
| 15:10 | ボランティアセンターへ帰設、活動報告 |
| 16:00 | 宿泊先へ到着 |
| 18:30 | ミーティング |
| 19:30 | 各自担当事務処理 |
| 22:00 | 就　寝 |

能登町 災害ボランティアセンター

## 7　能登町の医療提供体制の現状と問題点

能登町 小木クリニック
瀬島 照弘 先生からの講義

瀬島先生と学生の集合写真

学生は、瀬島 照弘先生から、震災直後から現在までの医療活動、遭遇した課題、そして心に残る思いを聴講しました。先生からは、被災直後から能登町での往診や避難所での医療支援を続け、現地の厳しい状況や被災者の心の負担についてご説明いただいた。

特に、仮設住宅での生活や孤立感が引き起こすメンタルケアの必要性と精神的サポートの重要性をお話しいただきました。

また、能登半島北部の医療施設の多くが再開したが、人手不足や経済的な困難が続き、地元の医療従事者も大きな心の負担を抱えている現状をご説明いただいた。

先生は、能登町の厳しい状況の中でも、被災者の心に寄り添い続けることの大切さを学生たちにお話しくださり、激励のメッセージをいただきました。この訪問で学生は、被災地での医療ニーズと、メンタルケアの重要性を認識する貴重な機会となりました。

## 8　学生から見た支援活動

信末 幸輝

救急医療を学習している自分たちが支援に行かせていただくことで、普段の授業、病院実習などで身につけた知識を実際の活動を通して発揮できた。高齢者の入浴介助では施設の方や介護協会の方と円滑なコミュニケーションをとることができ、笑顔になってもらうことができた。ブロック塀などの撤去では、安全な活動をするため、先生方にご指導いただき、消防機関における災害時の人命救助をイメージすることができました。消防官になった際の経験値として今回のボランティアは有意義なものになりました。

吉田 天翔

今回、現地の方々と対談する機会が多くあった。お話しした全員が、地元を愛していて、復興したら必ず帰ってくると言っていた。自分たちがした助力は微々たるものだったが、それでも周りの方々に感謝された。ボランティア支援の方々からも、今は若者の力が多く必要だと教えていただいた。一日でも早く復興できるように、また機会があれば、積極的に参加したいです。

木村 琴美

現地に来てみて、3ヶ月経つという今でも手付かずの場所が多くあり、まだまだ課題が残っていると改めて感じた。また、心のケアや教育面などこれから長期的に必要となるサポートについて気付くことができ、今後の自分達の活動が少しでも役立つたらいいなと感じた。

高橋 寛

ボランティアの体験は、日常のありがたさを痛感させ、家族や生活の大切さを再認識できました。震災による直接の体験から、関東在住の私たちも災害への備えを考え直すきっかけとなりました。能登半島への深い愛着と、震災復興への貢献を強く望むむが芽生えました。将来的は、能登町への支援を目指す決意を新たにしました。この体験は、災害の記憶を共有し、未来への準備と支援の大切さを教えてくれたと思います。

女川 陽生

輪島の火災現場、津波被害のでた白丸や珠洲、能登町に4日いて自然の恐ろしさ、自分の無力さ、人の温かさを感じました。学生全員で一日家財の片付けを行ったが1件終わった程度ので街全体が被災していました。実際見ないとわからない部分が多く存在しました。アルバムや生活感の溢れるものを多く取り扱ったり、被災された方と話したりと本当に感情的になりました。慢性期になった今、ライフラインの復旧が終わってはおらず、復興の遅れも感じました。災害の怖さをこの気持ち忘れずに生きていきたいです。また、能登で自分に出来る事を行いに戻りたいと思います。

松山 世那

ボランティアでは人の暖かさ、自分の無力さ、災害の恐ろしさ、人の役に立つことの素晴らしさを学びました。特に家財整理、撤去作業、被害を受けた家屋、火災現場の跡地を見て人生で初めて言葉が出ないという状況を経験しました。毎日行ったミーティング、お会いした方々から学んだこと、自分の目で見たものを大切にして活かし、全ての方への感謝の気持ちを常に持ち次に繋げていきたいと思います。4日間ありがとうございました。

小西 翔陽

能登の方々はほんとに暖かい方ばかりで、ボランティアをしていて感謝されるときにとても嬉しい気持ちになりました。ボランティア2日目の午後にある依頼をされた家でシャンデリアの撤去をさせていただきました。その時に依頼主の方から涙ながらに「ありがとう」と言われたことがとても心に残っています。積極的にコミュニケーションをとるなかで明るく笑顔で接してくれる人ばかりだったのですが、その中にも本当は打ち明けられていない部分があるように感じました。そこで自分たちが少しでも気が楽になるようにお話を聞いてみることによって、現地の方々に前を向いてもらうことができればボランティアとして力になれるこの1つだとおもいました。

遠藤 成矩

1月1日に発災し、日体大ロジスティクスチームに参加させていただき、後方支援に携わる中で多くのことを学びました。また、現地での活動も経験させていただき、災害医療・支援のノウハウを培う事ができました。この一連の経験を通して、改めて「人間力」の重要性を感じました。今後は、この経験を活かし、先生方、先輩方や現地で活躍されている方々のような素晴らしい医療人になるため、精進していきたいと思います。この貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

宮本 惇平

活動を通じて、「絶対にこの地を離れない」、「必ず復興させる」といった言葉に全力でサポートさせていただきたいと心から感じました。どのようにコミュニケーションをとれば良いか戸惑う場面もありましたが、家財の運びだしや入浴支援を通じて現地のお話をお伺いした際には、人間としても医療従事者としても成長できたと感じた瞬間でした。

今村 海里

現地に来てみて、3ヶ月経つという今でも手付かずの場所が多くあり、地震の威力と災害の怖さを肌で感じました。ボランティアとして活動し被災された方とお話ししてみて、厳しい状況ながらも前を向く姿に逆に私たちが元気づけられることも多くありました。心のケアや教育面などではまだまだ課題が残っているため、この活動で長期的なサポートが必要なことに気付くことができたと思います。今後の自分達の活動が少しでも役立つたらいいなとの心から思いました。

鈴木 唯華

どこまでも続く瓦礫の山と一面焼け野原となった現場を見た際は、言葉を失いました。同時に、地震が起き出しになるほどの激しい揺れや瓦屋根だけを残し全てを流し去った津波の威力を想像し、恐怖を感じました。そんな中で、被災された方々や被災地で医療・福祉を提供する方々とお会いし、お話させていただく中で、ひとりひとりさまざまな思いを抱え、厳しい現状と向き合っていることに改づかされました。活動後、心からの「ありがとう」という言葉をいただいた際には、微力ながら支援に携われたことを嬉しく感じると同時に、私たちの活動が少しでも役立っていると実感しました。今回の活動で得られた貴重な経験や学びを、今後、自身の成長につなげていきたいです。ありがとうございました。

松本 琉暉

実際に被災地の現場を目の当たりにして私は言葉が出ませんでした。被災された方は突然何気ない日常を奪われ、大切な人を失い、その怒りや悲しみをぶつけるところがどこにもないと言う現実に、可哀想と言う簡単な言葉では片付けられない胸の痛みを覚えたのと共に、自然災害の恐ろしさを身に沁みて感じました。

善家 翼

能登町での災害ボランティア活動は普段の授業では得ることの出来ない経験ができました。また、大学で学んだことを発揮する機会になったと思います。能登町は少子高齢化が進み復興が困難な状況です。少し家具を動かすのも困難を感じるのも大変な状況です。しかし、若い人の力があればそれを乗り越えられると思います。被災者の方はボランティアで訪れた私たちに感謝の言葉を常に伝えてくれます。辛い気持ちを分かち合い、復興へ前向きになれるように支援できるのは私たちです。自国は一見にしかすということわざがあるように自分で被災地をみて、声を聞き、現地のものにさわることが大切だと実感しました。

村上 凜

現地に行って、実際の被害状況を見ました。当たり前の日常が簡単に壊れてしまう災害の恐ろしさを強く感じました。発災から3ヶ月経ちましたが、復興が思うように進んでいない場所あり、日常を取り戻すことの難しさも感じました。時間では解決出来ない、地域の結束や心の再興にあるのだと思いました。現地の方々や支援されている方々の温かさに触れました。そこで、今の自分に出来ることは本当に大したことないのだと知りました。しかし、今後の自分に何が出来るのか必死に考えて、少しでもできることがあるならばそれを全力でやりたいと思いました。これから、今回の経験を糧に、いただいたバトンを大切に持ちながら救命士として走っていきたいです。被災された皆様の一日でも早い復興を願っています。

木村 磨功

後方支援を通じて、写真の整理や各種作業を支援する事で、ボランティアチームの活動を少しでも円滑に進めることが出来たのかと思う。それが今回の活動を通してのやりがいであった。また、3つの現地派遣団の支援を通して自分の作成した資料で多くの学生がボランティアに参加してくれたことが非常に嬉しく感じた活動になりました。